

【書評】

加藤碩一著 『石の俗称辞典(第2版)』

岩松 暉(GUPI 元会長)

あだ名のついている人がいる。私の学生時代にも、教授はじめいろいろな人に面白いあだ名が付いていた。どちらかというとなしみやすい人柄の人があだ名で呼ばれていたように思う。石も同様である。地元のランドマークやシンボルとなる石には、なしみを込めて何かに見立てた名が付けれられている。恐らく枯山水など日本庭園の「見立て」が、世間でも広く普及したためなのだろう。弁天岩のような神仏、トカゲ岩のような動物、弁慶岩のような偉人・武将、ローソク岩・置石のような身近な品物などなどである。産地の地名が付けれられた直裁的なものは、工業用によく利用されるものか、銘石として庭石などに用いられるものが多いようだ。

このように石の俗称は多種多様、全国にあまたある。それだけ日本人は石が好きなのかも知れない。実際今でも、水石同好会など各地にあるし、ミネラルショーは東京はじめ各地で開かれ、毎年超満員である。

そこで、石の辞典が作られる。その嚆矢は木内石亭(1725-1808)の『雲根志』であろう。石亭は江戸時代の奇石収集家・弄石家である。出身地が近江のためか、収録されているものは関西周辺のものも多く、全国バージョンが求められていた。そこに登場したのが、『石の俗称辞典 面白い雲根志の世界』(1999)である。本書はその第2版に当たる。著者はGUPI会長加藤碩一氏である。今も日本の奇岩百景選定事業を企画されている。加藤氏は、全国に分布する石の俗称を丹念に調べ上げ、その言われやそれにまつわる伝説、はては文学まで言及している。それも万葉集から和歌・俳句に及ぶ。雲根志と決定的に違うところは北海道の石も収録されており、アイヌ神話が随所に挿入されていることである。もちろん、学術用語も付記されている。その根気と博覧強記にはただただ恐れ入るばかりである。

辞典だから、当然、五十音順に並べられている。必要なときに必要な項目を調べるのが辞典である。しかし、本書はパラパラめくって拾い読みしても面白い。その上、写真も散りばめられており、なかなか楽しい。

注文を付けるとしたら、上記のようなジャンル別分類表や地域別索引などを付して、読み物としても面白く仕上げたい欲しかったし、カラー口絵も欲しかった。

石に興味のある方、コレクターにはぜひ一読をお勧めする。

加藤碩一著 『石の俗称辞典(第2版)』、愛智出版、B5判、408ページ、2014年10月刊、定価 税込7,344円 (GUPI 会員特別価格：税込6,000円、送料無料、直接書店へ)

